

中島案内原文抜粋

目次は以下のようである。

緒言、中島の起源、中島の位置、面積地價、戸口職別、區劃、土地の沿革、耕地整理、本村役場、齋田の事柄、悠紀齋田、齋田地主、齋田の構造警備所、用水、事務所其他、日日祓、地方官、拝觀心得大要、奉耕者農具肥料其他、齋田祓式、播種水口祭、齋館、現時苗場の様、頃日中の概況今後の祭式、中島實業の一斑、奉祝記念、中島駅、當五月現今中島発車時間、各地へ陸路畧里程、小学校、郵便局、駐在所、區長事務所、神職、宗教、青年會軍人會、消防組、演藝場、名所舊跡、名所、領主沿革畧、古跡、營業案内

内容の抜粋は以下のようである。

・緒言（大正四年乙卯五月廿一日 編者識）

大正四年は畏こくも、皇室におかせられ御大禮を行はさせらるると、芽出度き年にして臣民等しく大御代を祝するなり。殊に我が六ツ美村中島は、大嘗祭悠紀齋田の御地となり光榮ならびなし、依って一は奉祝の記念となし、一は世間の人中島を知るの便利ともなさんが為に此の小冊子を作り平易簡便を旨として中島の概要を記し名づけて中島案内となしたり。

・中島の起源

太古、中島は海中の島地にして葦島の一なりき麻井山と高住山との中間にあるを以て中島といへり、高住山は今の萬燈山一帶の古の名なり。「日久良志の高住山に雲はれてひれふる峯に出る月影」と云ふ古歌もあり葦島梢開くるに及びて日久良志の里とも稱へ碧海郡なり昔の里うたにも「小島中島岡島なども、昔や碧海(あをみ)の浪の中」という歌もあり。明治三十九年五月我が川東六ヶ村合併して六ツ美村となり中島はその大字となる

・中島の位置

三河国碧海郡矢作川の東六美村の南端にして、北は安藤正名、東は幡豆郡三和村大字羽角貝吹を廣田川を以て界し、南西は永良尾花米野浅井と耕地を以て接す。縣道土呂街道東西に貫通し西尾鐵道之に添ふ。

・面積地價

耕地宅地面積百五十町七反壹歩、筆数二千二百二十八筆、地價七萬五千二百七十四圓九十六錢 国有地面積貳拾貳町二畝十五歩、外に字高畑の部分あり。

・戸口職別 【大正三年末調】

専農：百四十三戸 七百四十人、兼農：五十一戸 二百七十人、商工：三十九戸 百九十人
雜：十八戸 九十五人、計：貳百五十一戸 千貳百九十五人
外字高畑農：十九戸 二百五人、總計：貳百七十戸 千五百人

・區劃

中島を大別して、上町、新町、本町、塚、後屋敷、小園、高畑となす。

・土地の沿革

太古は入海の島にして、附近の水面漸次埋まり開發となりしも。矢作川の流域近くにあり、排水宜しからず用悪水路完全ならざりし、明治十六年に至り隣村と協定し廣田安藤二川を改修し、高橋用水を開き、二十三年縣道の一部を改め三十四年率先して大耕地整理にかゝり、三十七年に竣る又大正三年縣道の一部新町央より上町に至るの改修をなし、大に便益を計る。大正三年九月高畑合併す。

・耕地整理

施工認可は三十三年十二月にして、三十七年四月竣工せり、前の土地、百六十二町余、あとの土地、百七十町余、総費額 貳万余圓。

委員長 早川龍介、副長 鍋田恒雄、副長 鶴田勝藏、事務長 早川治三郎、委員 廿一人なり。

・本村役場

六ツ美村役場は青野に在り、現今村長早川龍介、助役太田虎吉、収入役近藤安次郎諸氏なり又

縣會議員に鈴木氏、農會長に高木氏あり

本村は戸数一千六百七十五、人口一万八百五十七、反別田 九百六町、畑 三百八十町
宅地 三十六万余坪、学校 三、駐在所 四、あり。郷社犬頭神社、大聖字等は有名なり。

・齋田の事柄

曰(いわ)まくも畏(かし)こけれど今年十一月十日 天皇陛下御一代一度の最も尊き即位の式を京都になさるなり。これに大嘗(せう)祭といひて御先祖の神と天地の神を祭らせ給ふ祭をなさるなり。この御祭に無くてかなはぬ一番大切な供へ物とめしあがらせ給ふ御米御酒が齋田より奉る御米なり。清らな上にも清らかにするなりこの齋田は日本に二所にて、ゆき、すき、といふ。すきはさぬきの国、悠紀が三河のここなりこの二所か日本の代理となる儀なり

・悠紀齋田

大正三年三月六日六ツ美村大字中島字上丸の内四反歩を齋田と決定せらる諒闇に入り延期となりしも、存続の旨仰出され、四年五月三日改め示達あり十月十八日までに白米壹石供納の旨仰せらる。

丸の内は中島駅より西五町の耕地にして西方開潤地味肥沃の美田なり永禄の年板倉氏新地百石を起し築城を計りし区域なりと云ふ。

・齋田地主

中島上町五十九番戸早川定之助氏五十歳にして家農を業とす性質朴勤勉の士にして村政を執ること多年収入役助役村長となり現に郡會議員を奉職し勲七等を帯ぶ。

・齋田の構造

齋田は方形にして十字路を以て四區に分ち周らずに竹柵を以てし、東西に勅使門を建て北面に通用門を建つ竹柵の外周一間程を不浄除田となし、外圍二間毎に齋竹を堅て住連を張り、四隅に標柱を建て、榊を植え四手を付す反別四反歩なり。

・警備所

齋田の東隅に設け晝は青年會員夜は在郷軍人警衛す。

・用水

高橋用水の分流にして水源高橋に至る沿道を晝は四人夜六人にて六美村民輪番巡視す

・中島實業の一斑

中島は農七分商工三部とも見るべき所にして土地は肥沃なる壤土をもち、悉く二毛作行はれ麦菜を栽培し、過半牛耕を用う又副業として盛に養蠶をなす。

商業は大畧小賣業にして製造少く、工業は製絲の外、五月の紙鯉籠細工等にして他に見るべきもの少く、正しき奮発者の出づるを、待つなり然れども一般勤勉なり。

其他肥料の改良桑園の改善稚蠶共同飼育共同販賣稻種苗産米の改良等も着手しつゝ、あれば農業の側は益々良きに至るべし。

・中島駅

西尾鐵道は平坂より岡崎に至り本線に連絡す。中島停車場は上町にあり晝夜上下とも十一回朝七時七分を始め夜九時余に終り凡一時間毎に發車す岡崎へ四哩余三等拾一錢なり。

・小学校

六ツ美第三尋常高等小学校にして、尋常科三百四十三人、高等科二十八人、別に農業補修科を設け青年を教育す、成績何れも良好なり。校長を村井猪作氏と云ふ外、職員七名なり當校就学出席とも可良にして出席歩合九十七人六と九厘を示す本年三月も愛知縣廳より賞與金百五十圓を受く。

・郵便局

新町に在り、電話電信をも扱ふ局長を正八位杉浦喜助氏と云ふ。

・駐在所

新町に在り、安城警察署中島巡查駐在所にして巡查近藤庄太郎氏勤務す。

・區長事務所

新町巴城に在り、區長二人、早川治三郎、石川源佐工門氏と云ふ。

・青年會

六ツ美支會中島青年會にして、會員六十名、校長區長委員盡力す。大に發展せり鍋田氏を會長に頂く、朝起、神域、掃除、擊劍、繩綯(なわない)、書見、精神修養等大によろし。

・軍人會

六ツ美分會中島在郷軍人會にして三十六人あり。

・消防組

六ツ美に六部あり、公設にして中島消防組は第三部なり。人員四十二人。

・演藝場

一あり朝日座と云ふ、境に在り。

名所舊跡

・新町鎮座 村社式内 日長神社

祭神 彦炎瓊々杵尊（ひこほににぎのみこと）、吾田鹿葦津姫尊（あたかあしつひめのみこと）
大日靈貴尊（おおひるめのむちのみこと）

由緒 人皇廿六代繼體天皇の御代天皇の勅言により、三河葦島日奈加島に祀れる大神なり内大臣鎌足公の時勅使藤原匡房大神を拝み海中の深淺をトし碧海の開発にかかれりと云ふ。

延喜式 従五位下、国内神名帳 従四位下、慶長八年徳川家康より朱印地拾石を賜う四十年十一月指定村社となる氏子八十戸寶物に神代系圖あり。

・小園鎮座 村社 神明社

祭神 豊宇氣姫命（とようけひめのみこと）

由緒 長久元年九月十五日勸請樹木鬱蒼たる社にして大神宮の御厨の御園ならんと云ふ永正元年の御再建は中島城主由良光家寄附せられ尊崇深く鏡一面をも寄進せらる徳川家康公は屢々社地に来遊あり慶長七年葵紋付茶碗等を下賜せらる同六月朱印地高拾石を寄附せらる明治四十年十月神饌幣帛供進を指定せらる社内の御手洗池は小園池となり廣大なるものなりしが世の變遷に伴ひ小園池は埋れり。

・住吉 村社 住吉社

祭神 中筒男命（なかつつのおのみこと）

由緒 永和五年九月十八日鎮座。永禄三年庚申家康公参拝あり御紋付提灯を寄付慶長十一年御朱印地三石寄進寛永十七年三石六斗余と改めらる明治四十年幣饌供進を指定せらる。

・上町 村社 八幡社

祭神 譽田別尊（編注：ほんだわけのみこと＝応神天皇）

相殿 馬上天神

創建 應永五戊寅年八月

應永五年領主中島與五郎の勸請にして後、裔従五位下内匠頭方盛崇敬厚く子隆国を経孫倫盛のとき天文三年領地替となり後渥美郡大碓へ封を移せし後も尊崇深く例祭には代参あり。安政三年石鳥居寄進の際には十一代目隆功氏重臣白井直久幡井丹宮等を遣わさる。明治四十二年九月供進を指定さる。

・上町 浄土宗西山派 崇福寺

本尊 彌陀觀音勢至之三尊佛

由緒 木像

開基、村上天皇の後裔赤松園心入道の孫播備の太守師範の第八男天祐光譽と號す。応永年中なり始め延喜帝勅願の道場にして昌泰を寺の名とし天台宗なりしを天祐錫を移すに及び改め蘆（ろ）山崇福寺と稱す。学徒三百末刹七拾余ヶ寺ありしと云ふ御朱印地三拾石現在高須粹寶氏は四十二代なりと云ふ。

・本町 真宗 浄光寺

本尊 阿彌陀如来

中興開基は寛正五年、碧海小川城主石川新十郎源義信出家し、蓮如法王の弟子となり意眞と號し當寺を再興す。良永山浄光寺と云ふ。寺領四石八斗。見眞大師之繪像は元和五年板倉伊賀守實母妙圓の寄進。木像の本尊は板倉忠重本山へ願ひ宣如法主直書を以て免許せらる慶安元年朱印地三石一斗を賜う。

境内に銀杏の大樹あり

・堺 浄土宗西山派崇福寺末 龍泉寺

本尊 阿彌陀如来

別院 觀音大士

觀音大士は元の本尊。今の如来佛は本寺崇福寺の古本尊なりと云ふ。この觀音は傳教大師一刀三禮の彫刻なり天祐上人の上足昭空及（きゅう）穆上人住職となり相續七代永仙の代正保二年本堂炎上す。此の地崇福寺のすぐ南にして字名のこる万治三年當村佐口鑄次郎の先祖専求今の地に

建立す。

・字中道 板倉八右衛門戦死の墓

始祖は清和源氏の後裔(えい)なり子孫澁川と板倉とをなれる父を板倉頼重と云ふ。八右衛門好重は松平大炊助好景(かげ)に属(ぞく)し永禄四年五月中島の町裏に吉良の軍勢と戦ひ此所に戦死す好重は板倉勝重の父なり。

・町後 鎮守祠

昔永安寺境内の鎮守にして白山神を祀る板倉の守神なり。

・高畑 板倉伊州公蘆焼場

字大久後に在り板倉勝重を火葬せし跡今焼場として存す。

・領主沿革畧

貞觀年中 占部三河守

延喜 四条大納言

天徳 荒井兵庫頭

文治 中島内匠頭

応永末 由良光家

永禄 板倉弾正 松平大炊助

後吉良氏 維新迄旗本 小笠原氏

・巴城

字新町井龍にあり畑となり宅地となり巴(は)城の名のみ存す。後鳥羽天皇文治五年己酉年築建し文明三年辛卯年落城す。中島内匠頭(たくみのかみ)与五郎数代の居城なり。

・由良城址

永正の頃由良氏城地は後屋敷ならん殿海道馬取池などあり、耕地整理の際古銭六十貫入る古かめを発掘す、紀念として保存す。其他城址今詳ならず。

・醫家

上町 村山醫院 村山 良平、上町 江東醫院 志賀市三郎、本町 光揺眼科院 鍋田 駿哉



中島案内

本項は以下の資料を引用している。

[悠紀斎田中島案内]

編集人：牧 善丸、早川 治三郎

発行人：牧 善丸、印刷者：中村 角馬

発行日：1915（大正4）年6月5日

発売元：牧 つね、早川 芳太郎